

古事記序表考

岡 一 男

『古事記』は和銅五年（七一二）正月二十八日、元明天皇の勅旨によって太安万侶が稗田阿礼の誦習するところの天武天皇の勅語の旧辭を撰録して献上したものとされている。このことはその序の上表文にいうところだが、この序表そのものについて賀茂真淵以来屢々疑いがはさまれ、ひいては本文に及び、本書をあげて後人の擬作とする説が、沼田順義・中沢見明・筏麁ら諸氏によって發展せしめられて来たのである。しかし、『古事記』の本文を平安初期の偽著とする説は、橋本進吉博士らの上代特殊仮名遣史の研究の成果にもとづき否定され、元正天皇在老四年（七二〇）五月の舍人親王ら撰の『日本書紀』以前に位置することは確實とされている。ただ序表については、それが唐の長孫無忌の「上五経正義表」や宋の裴松之の「上三国志注表」やなどに結構・詞句が類似している点があるので、その模倣だといっているので、偽撰説がある。しかし、またこれは『作文大体』などにも説く雑筆の文章構造によるので、いちがいに「上五経正義表」らの模倣だとはいえないという駁論もある。また、よしこれを真似たとしても、それは『古事記』の序表より六十年前の表文であるから、我

が国に渡来しておらなかったとは言えないので、これをもって『古事記』の序文を偽作とはいえないのである。このことは、最近藪田嘉一郎氏によって新しく主張された、『尚書』偽孔伝序の三段組織を摸しているが故に、『古事記』序表を疑うというのも、同断であろう。太安万侶がこれら中国の序表を参考して、その体裁・詞句を摸したとしても、当然の手順で、それによって『古事記』の權威をこれら中国の經典とひとしいとしただけのことである。律令國家の元首に奉呈する表文として儀礼上その文範を中国に仰いだとしても、その内容・精神が彼とことなるわが国独自の点があればそれでよいので、唐文化圏内にあった当時の日本としては、あえて異とするに足りない。

しかし、『古事記』序表にいう、太安万侶が稗田阿礼の誦習するところの勅語の旧辭を撰録したというのは、前述の『尚書』序の、

漢室龜興。開設學校。旁求儒雅。以闡大猷。濟南伏生。年過九十。失其本經。口以伝授。裁二十余篇。以其上古之書。謂之尚書。百篇之義。世莫得聞。

とあるのや、その疏に

云失其本経。口以伝授者。蓋伏生初実壁内得之、以教齐鲁。伝教既久。誦文則熟。至其末年。因其習誦。或亦目暗。年九十。晁錯往受之時。不執経而口授之故也。

とあるのを参考し、伏生を阿礼に擬し、晁錯を安万侶に擬して、後人が『古事記』序を偽作したものである。なお、これによって晁錯が太子舎人にあげられたことにより、天武天皇旧辞勅語の際の阿礼を舎人とし、それを二十八歳としたのは伏生が漢の孝文帝の世に九十歳、従つてその秦校書の際の年齢によつたのだらうというのだが、それなら和銅四・五年際の阿礼の年齢が五十七八或いはその前後にしなければならないのをどう説明するか。また『史記』晁錯伝の正義及び『漢書』伏生伝の顔師古註によつて、伏生老いて正しく物をいうことができなかったので、伏生の女が通訳して錯に聞かせたとあるところから、阿礼を女性と見る可能性もなしとしないというのだが、その場合は稗田氏が女系の猿女君の一族たることを意識してのしわざだと想像しての上のことで、舎人を男官と見る立場とは矛盾して来る。

こんな風で、伏生授経の故事で、『古事記』表序を偽作したというのも考え過ぎと思われ、むしろ、安万侶がそれを下に置いて、阿礼の旧辞誦習を筆録したことを文章にしたまでと考えたい。阿礼が男性か否かについても古来説があるが、舎人が男官であることは、当時の用語例で動かせないし、「姓稗田名阿礼。年は廿八。為人聡明。度目誦口。私耳勒心」という書き方には、女性をさしたらしい修飾がない。古代の女性の年齢や実名など、戸

籍の遺存する場合を除いて、めつたに知られるはずがないし、「度目誦口」も文字について言つたにちがいないとすれば、とくに女性であるに拘らずというような断り書がない限り、男性と見るのがふつうであらう。阿礼という名も、生ルの連用形の名詞化と見れば、『正倉院文書』その他に、阿理・奈利・与利などの男性名があり、それぞれ在ル・成ル・依ルの連用形の名詞化と見られ、神の出現に関する顯ルのそれと限定する必要がある。又そうとしても、賀茂の阿礼乎止女に対して阿礼乎止已もあることは、すでに説かれておるとおりである。なお、序表のこの句は、「上五経正義表」の「孔穎達。宏材碩学。名振当时。」とか『文選』の孔融の「薦繡衡表」に「目所一見。輒誦於口。耳所暫聞。不忘於心。」とかあるによつており、孔穎達も繡衡も男だから、阿礼もそうだと見てよからう。なお、阿礼が天武天皇から旧辞を誦習することを命ぜられた年に、二十八歳であつたというのは、安万侶が阿礼から聞き知つたのであらうから、山田孝雄博士がいわれたように、撰銘の際、阿礼が生きていたことは疑いない。

しかし、なお、この邦家の経緯・王化の鴻基とすべき『古事記』が「正五位上勳五等太朝臣安万侶」というごとき無官・卑位の輩の名において奏上されたことにたいする疑惑が存するが、『古事記』の勅撰は、もともと天武天皇・元明天皇ともにブライヴェートな思召しから出發しているので、官撰の国史と同一に見られない。いわば、のちの『古今和歌集』勅撰と同じような性質である。国家的正史は、べつに大規模な史局において編纂さるべきであるし、またそうされた。「和銅七年二月。詔従六位上紀

朝臣清人。正八位下三宅臣藤麻呂等。令撰国史。」とあるのが、それである。公的な国史編集に当たっても、安万侶らより一層下位の者が任命されている。阿礼は多分内舍人だったと思われるが、「軍防令」にいう「凡五位以上子孫。年廿一以上。見無役任者。……性識聰敏。儀容可取。充内舍人。」に適合するとせば、相当の家柄の者だったと思われる。太安万侶は養老四年（九二〇）舍人親王奏上の『日本書紀』の撰者にも加っており、その裔の従五位下多朝臣人長は弘仁三年日本紀講筵の執講となっていたから、代々相繼いで書紀学をもって家学としていたにちがいない。それ故、『古事記』序表の偽作のごときは、この間にありえない。また、太氏は神武天皇の皇子神八井耳命の裔で大和国十市郡^{トナリ}富郷に代々居住し、その祖を祭った多社があり、『神名帳』に見えている。安万侶は壬申の乱（六七二）の功のあった多臣品治（美濃国安八磨郡湯沐令、すなわち同郡の東宮領の長官で、天武天皇の皇太弟時代から関係があった人）の一族、或いは子だという説もある。なお、「天智紀」に多臣蔭敷の女が百済の王子豊璋に嫁したよし見えていて、大陸とも関係がある家である。降って清和朝に多自然麿が現れ、神楽歌の完成に力をつくし、爾後多氏は神楽の名家として人長を専有することが多かった。従つてもともと、ともに大和の旧家である猿女君一族とも祭儀上親しかるべき因縁があり、安万侶は阿礼とも早くから知り合いだったろうと思われるふしがあり、阿礼を天武天皇に推薦したのも品治か、しかざれば彼ではなかったかときえ想像される。仙覚の『万葉集註釈』には「多氏古事記」から三輪伝説の引用を見るが、この書は

多氏の出自・本縁・歴史を語るものであったらしく推定されていることから、いよいよ安万侶が阿礼の誦習していた勅語の旧辭の撰録者として適任であったことがわかる。安万侶はのち従四位下民部卿に陞り、養老七年（七二三）七月に卒した。彼は養老五年日本紀講筵の際講博士だったと伝えられ、また卒後多社の東南の木下社に祭られたともいわれている。

稗田阿礼が天鈿女命の後裔である猿女君氏の一族の出で、その本貫が大和国添上郡稗田（今の郡山市）だったので、その氏の名とした。その氏女は縫殿寮に女婦として仕え、鎮魂祭における演舞や大嘗祭における前行を勤めていたことは国史・家牒に明徴がある。しかし、猿女君の子孫のうち女性だけが朝廷に出仕していたのではなく、弘仁十三年七月廿二日右少史猿女副雄なる者が公事にあたったよし、『政事要略』^{（礼部）}雑事に見えている。天鈿女命は天岩戸の神話や天孫降臨の神話に活躍する五部神の一、猿田彦神とともに俳優の業をもって世に立ったが、とくに猿女氏の女子は代々神楽をもって宮中に仕えて来た。従つてこの家は母系相統ではあったが、男子は舍人として朝廷に仕えていたと思われる。多氏も稗田氏も本貫が大和だから、壬申の乱の際は、近江方よりも天武天皇の方にみかたしたのは当然で、阿礼など少年時代に大海人皇子の一方の将である大伴吹負が寧楽に向わんとして稗田の地に至ったのを自邸に迎えたであろう。そして天皇が飛鳥清御原宮に遷都されてから舍人としてお仕え申したのであろう。（あるいは少年ながら吹負の軍に従ったということがあるかも知れない。）

天武天皇は兵をあげて東国にむかわれる際、伊勢の朝明郡の迹

太川の辺で天照大神を遙拝されたことや、大和の高市県主許梅に事代主神の神が、「神武天皇の陵に馬及び種々の兵器を奉れ。というのは、皇御孫命を無事に不破までお送り申し上げたからだが、更に今も守護しているぞ云々」など托宣したということが伝えられているが、天皇即位後、御窟殿をお建てになり、倡優・歌舞を見せなわしたというのは、やはり天岩戸神話を劇化したもの、すなわち神楽をご覧になったかと思う。こういう天皇のご信仰やご好向が稗田氏や太氏のごとき神祇の旧族の者を親昵せしめられるようになったと思う。

それに、この序表には、本文及び『日本書紀』に見えない事が二三見えている。神武天皇についての「化熊出川（入）」「列儼攘賊」は何とか処理が出来るとして、天武天皇について「開夢歌而相纂業」は『書紀』になく、ただその夢歌というのは天智天皇十年十二月近江宮で崩御の時の童謡三首があるのがそれだろうとのことだが、とにかく伝はちがう。また、「歳次大梁。月踵俠鐘。清原大宮。昇即天位」とあるのは、天武天皇元年（西）三月で、これは薬師寺東塔標銘（文武天皇二年）に「維清原馭宇天皇即位八年庚辰之歳云々」とあるのと、年次が一致する。ところが、『書紀』では前者を二年に後者を九年にしておるが、これは序表の方が正しいから、『書紀』以前となる。（尤も序表及び標銘を証として『書紀』の改修をいう学者もあるが、それは養老四年の修撰の折に議論があつて稿本を改訂したのであらう。）

なお、原田敏明氏はその著『日本古代宗教』に『古事記』上巻の神統譜及び神話が『紀』の本文及び多くの一書の説を統合整理

したあとを指摘されたが、大和から兵を起し、大和に都を復せられた天武天皇としては古代の神話の再生を体験されたわけであり、また、壬申の乱そのものが皇統に関することであり、天皇に御方した功臣たちへの行賞の意味での（それらは前朝以来不遇の者及び大和の旧門が多かった）、氏姓の改正ということもあり、それには古伝の旧辭及び日嗣の再検討が必要になり、ついに天武天皇十年三月に川島皇子らに命じて帝紀及び上古の諸事を記定せしめられた。この時に降された詔が、『古事記』序文の

朕聞。諸家所寶帝紀及本辭既違正実。多加虚偽。当今之時。

不改其失。未經幾年。其旨欲滅。斯乃邦家之経緯。王化之鴻基焉。故惟撰帝紀。討殺旧事。削偽定実。欲流後葉。

であるが、撰者の中には諸王のほかに、上毛君三千、忌部連子首、阿曇連稻敷、難波連大形、中臣連大島、平群臣子首らの臣下が加わっており、大島・小首がみずから筆を執つてこれ録したのであるが、これに対してたとえば忌部連子首だけでも心平かならざるものがあつて、紛糾し撰録が捗らなかつたのではなからうか。そこで、天武天皇が神代において中臣・忌部とならんで、あるいは以上に勢力あつた五部神の一人であるが、今は忌部氏の被官になつてゐる猿女君氏の稗田阿礼をあげて、御自身で帝紀及び旧辭の勘定に乗り出されたのではなからうか。近江に猿女養田があつたよし見えているが、これは近江朝廷に貢奉されていた猿女たちの料で、阿礼は稗田に生れ、その少年時代を過した者であらう。そして幼時から家伝の旧辭や歌舞や古文書には習熟していただろうし、また附近の山野を歩きまわり、富雄川や法隆寺、三輪山・耳梨

山・香久山・畝火山・飛鳥古京にもあそび、種々古代から伝承された祭儀や舞楽や旧辭を見聞したことであろう。ことに稗田の地は壬申の乱で重要な地点となり、一時吹負の軍があやぶかったのだから、それを身をもって体験した彼は、天武天皇に古代の英雄神の姿を觀、またつき従う舍人たちの雄々しさに羨望を感じ、機を見て清御原の新宮に出仕したのであったろう。そしてその聞見聡明と博覧強記は早く天皇の御目にとまり、また御窟殿の歌舞・倡優には、陪觀のみならず、出演もして、その旧辭朗誦ぶりをもお耳に入れたかと思う。

こんなわけで、天武十年の修史のことが行きなやむと、ことごとしい顯族たちの修史局で仕事をさせるより、ご自身でやろうとされて、そのお相手を、稗田阿礼に命ぜられたのであろう。大體の方針は、まず宮廷伝来の帝紀及び旧辭を底本にして諸家のもたる帝紀及び旧辭の諸本を討覈して取捨撰択して一編の統一ある成書としてとされたのであろう。その中で帝紀は「欽明紀」二年の条にあるように、「帝王本紀。多有古字。撰集之人。屢經遷易。後人習誦。以意刊改。伝写既多。遂到舛雜。前後失次。兄弟参差。」ではあったが、この帝王本紀又は帝紀が若し『大日本古文書』^{廿四}に見えている「日本帝記一卷十九枚注」及び『正倉院文書』後集十七の「帝紀二卷日本書」とあるのと同性質のものとするれば、分量はそれほど多くない。また、「持統紀」二年十一月の条の「皇祖等之騰極次第（古云日嗣也）」とあるのは、天皇の即位、崩御の際にもとは口誦されたもので、いわば旧辭の一種だが、その後は成文化されものを朗誦したとすれば、これも同じ物

であろう。そして、それは御代々々そうされたことだから、読み方はわかっていたろう。だから、天武天皇の十年の場合も「帝紀」は割に早く整理されたかも知れない。ただ、上古の諸事の記定については、宮廷にも家々にも種々の伝承があつて容易に統合ができなかったと思う。これを前提にしないと、天武天皇十三年（六八四）に詔して、「更改諸氏之族姓。作八色之姓。以混天下万姓。」と宣い、翌年にかけて、真人・朝臣等の姓を賜わったが、それらの氏族の中、上層部である真人・朝臣の大部分は、その出自が『古事記』の、それも帝紀の部分に見えていることが説明されないからである。それから當時上古の諸事がすでに記定されていたとすると、天武天皇が阿礼を召して新たに勅語の旧辭を誦せしめられるはずがない。また、十年三月条の修史の記事がその完成をつげるものであったら、阿礼の誦習はそれ以前の手続としなければならず、従つて序表の「然運移世異。未行其事矣」と矛盾して来る。平田俊蕃氏著「日本古典の成立の研究」

天武天皇が阿礼に勅語の旧辭を誦習せしめられた所以は、新たに多數の氏族の祖を皇統に加えてこの帝紀が天皇の親戚によること、及びさまざまな旧辭を統合して、一君万民の神權國家・氏族國家の本辭を天皇の權威で確定し、律令政治が單なる唐制の模倣でなく、世界史的必然であり、それはわが民族の古伝、「先聖」からつたえられた「本教」によつて、あきらかに啓示されているとするためである。『古事記』の本文が「天地初発」からはじまり、序表が「混元既凝云々」から筆を起しているのも、こう考えないと、わからないであらう。「智海浩瀾。潭探上古。心鏡燦煌。

明親先代」給うた天武天皇は、古代の氏姓国家と新しい律令国家の統一をこの帝紀と旧辭との統合によってもたらそうとされたことは、近時の諸家の説くところだが、そうしてそれにちがいないのだが、それが芸術的に達成されたところに特徴がある。それは私がいつか旧著『古典と作家』の「古代日本のいくさ物語における悲劇的なもの」で説いたように、天武天皇の英雄的詩人のご稟質によるのである。民俗学者の説によれば、ご幼名大海人皇子は御乳母の氏の名から来ているというが、そうだとすると、古代の大きな芸能氏族たるアマの伝承にもご幼少から通じておられたのである。また、壬申の乱に天皇の軍には舍人が大いに活躍していたことが注目されているが、その舍人の中には坂本太郎博士も注意されたように、和邇部君手・調連淡海・安斗宿禰智徳などのごときは日記を残し、文筆にもすぐれていたことを示しているが、『日本私記』とくに『古事記』の氏族関係の記事における丸邇臣に関するものが断然他氏を圧しているのは、君手が天皇の御信任をえていたからだと思われる。なお、丸邇臣・春日臣・大宅臣・粟田臣・小野臣・柿木臣などいずれも孝昭天皇の皇子天足彦国押人命から出ていて、カタリゴトやウタの伝承・管理で著名な氏族である。従って猿女君伝承の天若戸神話や天孫降臨神話が『古事記』にあるとて、阿礼を女性とみる必要はないのである。かつて武田祐吉博士は、『古事記』のイサナギの命の筑紫の日向の橘の小門のアハギ原の禊祓の際、投げ棄てられた御裳（真福寺本には御囊とある）に時量師の神がうまれられたという記事に著目して、本居宣長説に従って裳は男性は用いないから「古事記の物語の語り手が

女性であって、知らず識らずの間に婦人の服装が挿入せられたものか」と考えられた『古事記研究』^{一、帝紀攷}のは、この偉大な碩学のめったにない千慮の一失である。宣長説のあやまりは、敷田年治が『標註』に訂している。すなわち、「景行紀」に「蝦夷等、悉慄則褰裳披浪。自扶王船」や『熱田縁起』の「倭武尊褰裳。跋涉懸度」などをあげて、男服でもあったことをいっている。阿礼が男性でも猿女君氏の伝承に習熟していたろうことは、すでにいったとおりでである。臆断かと思うが、猿女君は元来猿田彦大神につかえていた巫女の家で、もと伊勢の渡会にあつたとおもわれる。猿田彦は道祖神とも日神とも考えられるが、かつて津田左右吉博士が説かれたように、天照大御神の伊勢率斎が顯宗朝にあつたとすると、その前後に猿女君が齋宮にかわって宮廷の鎮魂に当るべく召されのではなからうか。サルダヒコの溺死の話やヒルコの流された話には、その交代があらわれていないか。天照大神が女性とされたのは、その司祭者ヒルメムチが女性だったためで、古く大和朝廷では、最高主権者であり、最高司祭でもあつたヤマトヒメの命が皇祖神としてオホヒルメを祭っていたのであろう。猿女君氏が宇治土公の庶流だとあるのは、その末流の徒が種々の滑稽な芸能で民間各地に散在していたからだろう。

そういうわけでわが国のいちばん古い伝承が猿女君に存し、その氏族が衰微しつつあつたのを天武天皇は遺憾に思召されこれも稗田阿礼に旧辭を誦習せしめられた動機となつたと思う。天皇の御意志は、日嗣と旧辭とを統合して新しい旧辭をつくられるにあつたから、単に伝来の帝紀及び旧辭の各一本を底本として種々の

異本で校合したというような物でなく、最も古い由緒あるもので、旧辭が長編の語辭として旺んに誦出・流伝しつつあった時代のものを再現されようとしたのであろう。それには日嗣及び旧辭をいくたびか阿礼に誦習させてお聞きになり、口誦文芸としても古代的で莊嚴・雄大なものをおえらびになったのであろう。そして旧辭も猿女君・丸邇臣・出雲臣、その他の氏族に伝承されたもので、由来あるもので広く民間にワザラギ・カタリゴトとして流布していたようなものは、おとり入れになったのであろう。すなわち、天武天皇は宮廷伝来の旧辭、それは津田博士によれば六世紀、継体欽明の頃、第一次の集成を見たものであるが、それが七世紀の末までにいろいろの異本が出来、そこに新しい古伝承の発展もあったのだが、たとえば『万葉集』巻一の巻頭歌は雄略天皇の御製となっているが、結句の形からいって近江朝のものだと窪田空穂先生がお説きになったことがある。そういう新しすぎるのは、天武天皇はお取り入れにならなかったが、単に宮廷の古伝承ばかりでなく、それから分化・発展していった、民間説話も撰取りし、統合して、天地初発から推古天皇まで渾然として雄大な古代叙事詩を創作され、先代旧辭の精神を再生されたのである。――これは重ねていうが、天武天皇の英雄的詩人のご稟質とそのたぐいまれなる悲劇のご体験と、阿礼の絶倫なる学才と口芸の能と記憶力との結合によるので、訓みとき難かった古文辭も阿礼によってわけなくとけたことも屢々あったことと思う。この誦習の意味については、諸家に種々の異説があるが、誦誦・誦誦・誦誦・誦誦の習熟をかねているとすべきで、津田博士のいわれるように「誦む

ことは畢竟古書を見て、そのよみ方を解すること」で、阿礼はその素姓からいって相当古い文辭を古語で訓釈する力をもっていたにちがいないが、それとともに最も古い諷誦のしかたも伝承していたと思われる。この説は、五十嵐博士が晩年『国文学研究』^{第二十}号第一の「国文学に於ける第一着眼点――主として創作心理的に見て」において縷説されたところで、博士は「誦習の一語はおそらく朗誦・選撰・練習の三義を含んでいるのであろう。朗誦とは内容を活かして朗々と美しく読むことである。選撰とは目録し、或は素読して、一通り文路を迎えるのみならず、更に抑揚、接離、音彩、位取、その他いろいろな音声上の風味を加へて読みつつ、類書を懇ろに比較した結果、その中から最も妥当な、優れた活きた一種を選び出だして、それを本文と定めることである。練習とはかくして選まれたる本文を、繰返し繰返し練習して、それを立派な芸術的の読物に磨き上げることである。孔子は言之無文。行而不遠と言った。同じ事柄を書いても表現が立派でなければ、永遠に行はれぬものだといふので云々」といわれたが、その本文の選撰を天武天皇が阿礼の誦誦によってなされて、これに統一をあたえられ、定本としようとしたものを更に阿礼に誦習せしめておかれたとすると、近時の天武天皇親撰説とも調和するであらう。天武天皇はそれを十一年三月境部石積らに命じて撰せしめおかれた『新字』（一部四十四卷）によって録しておきたいと思つていられたうちに、朱鳥元年九月崩御されたので、その事をはたされなかったのであろう。

ところが、元明天皇の和銅四年九月十八日にいたって、太安万

侶に詔して、稗田阿礼の誦するところの勅語の旧辭を撰録せしめられたのである。これは元明天皇が平城に奠都され文物燦然とし、国威大いにあがっているにかかわらず、よるべき正史のないのを闕典と感ぜられ、それを修する前作業として、このことを安万侶に命ぜられたのであらう。この阿礼が天武天皇の勅語を誦習しているということを元明天皇が知られたのは、あるいは安万侶の奏上によるかも知れない。阿礼は天武天皇の崩御後は郷里稗田に引退していたのを安万侶が京に召見して、その撰録をし、和銅五年正月二十八日業成つて献上したものとされる。阿礼は天武天皇御撰定の本文（それは數書を前述の手続で參校したもので、まだ成書にはなっていないものだが）によりつつ朗々と誦出して行つたのを、安万侶が仔細に採摭して行つたのであらう。その際の安万侶の苦心は「上古之時。言意並朴。敷文構句。於文字即難。已因訓述者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中。交用音訓。或一事之内。全以訓錄。即辭理互見。以注明。意況易解。更非注」という言葉にあらわれておる。なお、上代の特殊音を嚴密に書きわけたり、古語のアクセントを上去の文字であらわしているのは、いかに安万侶が阿礼の朗誦ぶりを忠実にあらわさんと努力した趣がよく見える。また「亦於姓日下謂玖沙詞。於名帶字。謂多羅斯。如此之類。隨本不改」とあるのは、

勅語の旧辭の原拠となつた諸本の用字法で当世も慣用されているものは、そのままにしておくことである。従つてこの一段は、『古事記』の凡例として是非必要なことである。

なお、この『古事記』の文章を惡文というのは、漢文の文法に熟せざる者の言で、「混元既凝。氣象未效」と、中国の宇宙論によつて筆を起し、「乾坤初分。參神作首」と直ちにわが神話に入り、ついで人代の伝説・歴史を簡説して、本書の綱目をあげ、ついに天武天皇及び元明天皇のことを叙して、『古事記』撰録の動機・成立過程、更にその撰録の方針と上中下の巻わけについて述べているが、実に當々たる名文章である。とくに天武・元明兩帝の徳をたたえて中国の聖帝にまさるとしたるがごとき、『古今和歌集』序の「からうたもかくぞあるべき」と紀貫之が豪語したのに似ている。また「才をもととしてこそ大和魂の世にもちいらるる方も強うはべらめ」といった紫式部の學問觀にもかやうものがある。和銅四年九月十八日とか、和銅五年正月二十八日とかいつて干支その他の修飾のないのをもつて、この序表の擬作をいう者は、『三代実録』や『文徳実録』の表序もそうであるのを、如何に解しようとするのか。